

第1回「誓いの式」について



看護師という職業に対する自覚や責任を意識してもらうことを願って、初めて病院実習に臨む直前の1年生を対象とした「誓いの式」が11月9日に举行されました。

「誓いの式」は、今年度からスタートした新カリキュラム関連イベントという位置付けですが、看護師（看護婦）がナースキャップを使っていた時代では、「戴帽式」という名称で催されていました。その後、ナースキャップが廃止されましたので、最近では、ナイチンゲールの灯に誓う式、戴灯式、継灯式、誓いの式、ナーシングセレモニーなどと、呼び方も様々になっています。一方、そのような式を行わない看護学校も少なからず存在します。米国では、このような式典は（Nursing）Pinning and Capping Ceremonies と呼ばれます。

簡単に言いますと、「ピンのついたナースバッチやナースキャップをつける儀式」ということで、卒業式とは別になされますが、より大切なものと考えられています。それは、看護学生がいよいよナースの世界に入っていくという意味があるからです。ただ、歴史的にみると、このPinningの儀式は12世紀の十字軍にまで遡ります。Cappingが意味するナースキャップについては、19世紀後半当時病院は教会に付属していたことから、修道女がかぶっていたベールがその原型になったとされています。

さて、話を本校の式に戻しますと、1年生の担任である坂井教員自らによって作製されたナイチンゲール像が舞台前の中央におかれ、一人ずつがその像のろうそくから火を貰い受けました。全員が舞台の上下に整列した後、ナイチンゲールの誓詞を合唱して、式が終了となりました。1年生のみならず、2年生も参加してくれた今回、終始、厳かな雰囲気

が感じられました。「ろうそくの火」はナイチンゲールが唱えた「人間愛の象徴」とみなされており、本校の学生には「看護学生としてしっかりとした学びを成し遂げてもらいたい」と願うばかりです。写真は1年生の集合写真です。

なお、本校の「誓いの式」は、メディア旭川に掲載予定です。（文責 林）